

## ..胃の気の脈診

藤本蓮風著 『図解／簡明鍼灸脈診法』 一胃の気の脈診—を参考に

令和5年11月の勉強会で、胃の気の脈診について私（伴 尚志）が解説しました。その際、私が語った胃の気の脈診の内容が、北辰会における胃の気の脈診とは異なるものであると私はしきりに強調しました。そのため、北辰会ではどのようなものを胃の気の脈診としているのか？という質問が出ることになりました。

私は北辰会と30年以上かかわっていないため、現在何をしているのかは実はよく知りません。この文章では、30年以上前に出版された北辰会の書物を書庫から取り出してきて読み直し、それを基に考察してみました。ですから、現在では、北辰会は異なる考えを持っているかもしれませんので、その場合は私に連絡していただけると嬉しいです。

書庫から取り出してきた書物で表現されている北辰会の考え方と、一元流鍼灸術の考え方の違いは、実は驚くほど深刻なものでした。

この小文は、その違いを明確にするとともに、真実の「胃の気の脈診」を明らかにして、それに基づいた一元流鍼灸術の考え方をさらに研ぎ澄ましていこうとしています。

### ■目次

- 『胃の気の脈診』概観
- 胃の気は脈診の土台
- 生命力と病とは相反するものか
- 病は生命力の表現である
- 『胃の気の脈診』における弦急脈
- 生命力がなければ病はない
- 病と生命力とは陰陽関係にはない
- 養生とは生命を磨くこと
- 参考書

## ■...『胃の気の脈診』概観

書庫から取り出してきた北辰会の書物というのは、藤本蓮風著『図解／簡明鍼灸脈診法』  
一胃の気の脈診― 自然社刊／昭和59年3月15日第1版です。以下『胃の気の脈診』  
と省略して記載します。この古い書物が現在の北辰会とどう関係しているのかは、わかり  
ません。そのことを前提として考察を進めています。

この書物に何が書かれているのかというと、北辰会の脈診法の紹介です。まず全体を俯瞰  
していき、その後、内容について論じていきます。

まず概論としてさまざまな古典が引用され、

- ・脈を診るとはどういうことか
- ・胃の気とはなにか
- ・胃の気と脈との関係

について解説されています。

さらに

・張景岳のいわゆる「弱以滑（じゃく もって かつ）」を胃の気の脈診の中心として、  
それを発展させる形で、弱以滑が欠ける脈状全てを弦急脈と呼び、「諸々の脈状に弱以滑  
の脈象が存在することが、平人であり、これに反するものは、すべて弦急の脈、と解」（48p）  
すると述べています。この概念を基にして、北辰会の脈診解釈が展開されていくわけです。  
ここ重要です。

すなわち、

・弱以滑が欠けている脈状をすなわち「弦急脈」と定義して、これを四種類に分けて紹介  
し、  
・その分けられた四種類の「弦急脈」それぞれに名前を付けなおし、それぞれの症例の紹  
介をしています。

つまり、ここでいう「弦急脈」というのは、「弱以滑が欠けている脈状」すべてを指すも  
のです。ですから、非常に広い範囲の概念なわけです。実際に見ることのできる個々の脈  
状を意味する言葉ではありません。その広い意味での「弦急脈」を四種類に分けて名づけ、  
今度は実際に見ることのできる脈状として解説しているわけです。この中身については、  
後に検討していきます。

おまけとして、

・景岳全書の脈神章から十六脈（浮沈遲數洪微滑瀦（しよく）弦芤（こう）緊緩結伏虚実）  
の紹介および中医学的解説、さらに北辰会的解説をしています。

・死脈として歴代伝えられている七死脈（雀啄（じゃくたく）・屋漏（おくろう）・弾石（だんせき）・解索（かいさく）・魚翔（ぎょしょう）・蝦遊（かゆう）・釜沸（ふふつ））の紹介、および中医学的解説、さらに弱以滑の観点からの北辰会的解説をしています。

そして最後にまとめとして

・脈診におけるこまごまとした実用的な注意点が述べられています。

本書の全体は、以上のような構成となっています。

それでは、その中身について、検討していきましょう。

## ■ 胃の気は脈診の土台

はじめに数種の古典を紹介したうえで、伝統的に言われている胃の気の脈について、

1 四時陰陽に従う脈：『素問』平人氣象論

2 名状もつてするに難しき脈：李念菽『診家正眼』

3 有力無力による脈：原南陽『叢桂亭医事小言』

4 一定の恒常性の有無を診る脈：原南陽『叢桂亭医事小言』

5 胃の腑の働きを直接候う脈：永田徳本『梅花無尽蔵』

6 中位にあらわれる脈：永田徳本『梅花無尽蔵』；程国彭『医学心悟』

7 衝和と弦急の脈：『靈枢』終始篇；『素問』玉機真蔵論；『素問』脉要精微論からの解釈と、古典に記載のまま、まとめています。古典の文言をそのまま訳しまとめているわけです。

次に藤本氏が自身の『胃の気の脈診』に包含されている生命観について述べています。一元流鍼灸術の生命観にも通底する、大切なところです。

「胃の気をこそ土台にして諸々の情報が、脈状に現われることをすでに学習した。また、脈とは、胃の気そのものであることも我々は知ったのである。脈が刻々と不断に変化することも、畢竟、胃の気（生命力）が様々な環境と影響に出合い。個体維持の目的性にそうべく適応する多面的な”顔”であったのである。・・・（中略）・・・脈診するということは、胃の気の多彩な”顔”盛衰を察知することにこそ、その本領があったのである。」(26p)

この文章たいへん重要です。何回も繰り返し読み、しっかり理解していきたいところです。

一言で言うなら、「脈診には生命力の状態がそのまま表れる」ということです。生命力は、身心の内部状況です。生き物の内部状況は刻々と変化します。この刻々と変化する内部状況が、刻々と変化する外部状況と出会うことによって、さらにさまざまな変化が起きているわけです。

脈診には、このようなダイナミックに変化する、生命力の内部状態が、表現されているわけです。ですから脈診においては、「生命力」すなわち胃の気、をまずは意識して診なければなりません。胃の気の状況という場—舞台上に、個々の脈象が表現されているのだということが、しっかり理解されなければならないわけです。

そしてさらに、『胃の気の脈診』の生命論として藤本氏は『老子』をとりあげています。「生きとし生けるものの実相は、やわらかく、しなやかで、生き活きとしているが、死に赴き枯れるものは、堅くもろいものである、と。〔伴注：『老子』には〕生命の実体を直感的に記述している。」(29p)として、「胃の気の脈診法はこのような生命論に基づくものであることに気づかねばならない」(同ページ)と藤本氏はさらに語っています。

生命とはなにか。あるがままの生命を表現しているものとして脈を診ること。これが胃の気の脈診であるということ。まさに「脈診するということは、胃の気の多彩な’顔’盛衰を察知することこそ、その本領があった」(26p)と、藤本氏は考えているわけです。脈が刻々と不断に変化することは、まさに胃の気の表れ—生命力の表現であると。非常に雄大でダイナミックで自由な脈のとらえ方である、と言えるでしょう。

ところが藤本氏は自身の腕力で、その胃の気の世界—生命の世界を破壊していきます。

## ■ 生命力と病とは相反するものか

藤本氏は、明代末期の医家、張景岳が表現した胃の気の脈「弱以滑（じゃく もって かつ）」を胃の気の脈の中心にすえ、「弱以滑のない脈状」を弦急脈と名づけてそれを四種類に分け、北辰会の診脈法としています。

その理由として藤本氏は臨床の実際として、「諸々の脈状に弱以滑の脈象の存在することが、平人であり、これに反するものは、すべて弦急の脈、と解したのである。それ故、この弦急脈は、4つに分つものであることが判明した。」(49p)と述べています。

ここでいう弦急脈とは、診ることのできる弦急脈ではなく、弱以滑の欠けている脈状すべ

てのことを指していることに注意する必要があります。いわゆる一つの上位概念—抽象的な概念なわけです。

藤本氏はまた、この「弱以滑」の脈状についても、抽象的な概念として捉えている可能性があります。そのためでしょうか、「諸々の脈状に弱以滑の脈象が存在することが、平人」と述べています。いわば、弱以滑という脈状および弦急の脈という脈状を、対抗する概念、相入れない概念として提示し、その根拠として、明代の偉大な医学者である張景岳の言葉と、自身のグループにおける臨床的实际を掲げているわけです。

皆さんはこの矛盾を、理解することができるでしょうか。

一方で藤本氏は、「胃の気をこそ土台にして、諸々の情報が、脈状に現われる」と述べています。つまり、諸々の脈状の情報はすべて、胃の気を土台にしていると述べているわけです。ところが一方ではそれに反して藤本氏は、平人と病者とを対応させ、「弱以滑の脈象が存在する平人」であると、これに「反するもの」をすべて弦急の脈という病者の持つ脈状の概念にしているわけです。

「生きとし生けるものの実相は、やわらかく、しなやかで、生き活きとしているが、死に赴き枯れるものは、堅くもろいものである。」と藤本氏は述べています。けれども、生きるものはみな死にます。死に赴かない生は存在しません。このことを知るならば、生とその中であってさまざまな症状を呈する人の、生と症状あるいは病は、対立する別々のものではありません。ともに、ひとつの生命の流れであり、ひとつの生命が変化していく過程で現れる「生命力の表現」でしかないのです。

すなわち、「生きているかぎりすべての生は存在している」わけです。生き活きと生きていようが、死に赴き枯れる方向にあるが、それは生命力の変化過程—バイオリズムの途上なのです。生の方向に一方向に進む「生」はありません。同じように死の方向に一方向に進む「生」もありません。人は、疲れたり、元気を回復したりしながら、ゆるやかに生のバイオリズムを浮き沈みしながら、生きているものなのです。

その間、さまざまな症状を呈すこともあり、なんらかの疾病の名前を与えられ、あるいは難病に分類されることもあります。「疾病は生命力の表現である」と言えるわけです。

藤本氏も実は自身の言葉で述べています。「脈診するということは、胃の気の多彩な’顔’盛衰を察知することにこそ、その本領があった」(26p)と。

氏はなぜ、生と病とを、平人の弱以滑の脈と弦急脈とを「あい反するもの」としてしまったのでしょうか。たいへん残念に思います。

## ■ 病は生命力の表現である

「病は生命力の表現である」ということ。これがすなわち、一元流鍼灸術における脈診の考え方の基礎となっています。まさに「胃の気の多彩な’顔’盛衰を察知すること」。これこそが一元流鍼灸術における「生命を診る脈診」の基礎となっているわけです。すべての生命の変化相、変化の形が脈に表れている。その生命の姿の一過程として「弦急脈」をもとらえなければならぬと考えているわけです。

すなわち、藤本氏が指定する「弦急脈」を呈する病も実は、生命の一形態なのです。生命に反して病があるのではなく、病も生命の一形態なわけですから、あたりまえのことです。生命に反して病があるわけではない。生命があるからこそ病があるわけです。ここがとても大切なところですよ。

脈状で言い換えるならば、胃の気の脈がない、ということは生きている限りありえません。生きていれば脈のすべてが胃の気の脈の一変化なのですから。

脈診を通じて捉えることのできるいわゆる堅い脈状である弦脈や弦急脈というものも、胃の気—生命力の、変化したものです。そのため、堅い脈状である弦脈や弦急脈は、頑張っている、頑張ることのできている脈状であると表現することができると、一元流鍼灸術では考えています。

七死脈と言われている脈状も実は、生命力があるからこそ表現することができ、診ることができるといえます。生命力の中心が本当に弱ってしまえば、七死脈として表現することもできなくなります。それこそが藤本氏もいう（119p）、神の脱けた脈状です。六部定位の整った、あたかも胃の気がしっかりしているように診える脈状。良い脈状に診えるものを搏つのです。死に瀕しているような患者さんに現れる、そのような脈状こそが、胃の気の脱けた脈状なのです。そこからさらに神が脱げきると、脈は搏つことを静かに止め、呼吸も止まることとなります。死に抵抗して生命が暴れあるいは苦しんで、七死脈のような極端な脈状を呈するようなこともなく、ただ死んでいくだけなのです。

さて、藤本氏の「諸々の脈状に弱以滑の脈象の存在することが、平人であり、これに反するものは、すべて弦急の脈、と解したのである。それ故、この弦急脈は、4つに分つものであることが判明した。」（49p）と述べている、この言葉が、いかに大きな問題をはらんでいるかということは、ここまでの私の話でご理解いただけたと思います。

## ■『胃の気の脈診』における弦急脈

言語化すると、それが存在すると思ひ、それを探し始めてしまいます。東洋医学の歴史はその積み重ねともいえます。真偽を見分けることの難しい、繊細な手作業をおこなう治療家に植え付けられた信仰、これが古典として積み重ねられてきてしまったとも、これは言えます。

また、見ることと言語化することの間には、大きな隔たりがあります。実際に見ている指先の風景を言語化していくわけですから、そこには大きく深い問題が横たわっているということが理解されなければなりません。

- ・ 指尖感じ取ることのできるものは個人個人で異なる。感覚とは何でしょうか。
- ・ 指尖の敏感さや鈍感さは個人個人で、体調によっても異なる。
- ・ とらえたものを表現することのできる、表現力は個人個人で異なる。
- ・ とらえようとする方向によって、表現できるおおもとのとらえ方が異なる。
- ・ 指尖の風景の中から、何を取り出そうとしているのか、そこが問題。
- ・ 「自分が正しい」と断ずると、自分が診ているもの以外のものが見えなくなる。

思いつくまま簡単に挙げてみても、これだけ多くの課題があります。

「見る、そしてそれを表現する」ということは、このように大変な事なのです。

しかし藤本氏は、その危険を知ってか知らずか、やすやすと乗り越えて、胃の気が欠けているとした脈状を四脈に分けて解説し始めます。

四種の弦急脈の実際の記述は、以下のとおりです。

49ページから掲げられています。

第一脈・弦急脈：「和緩と滑利がなく、硬く引きつった感じで、ギシギシと指に触れる。」

「硬く緊張した脈であり、力の有無は一応関係ない」(49p)

第二脈（枯脈）：「第一脈のように、引きつったり著しく堅くはないが、潤いがなく、しなやかさや、和緩に乏しく、ちょうど、ひからびた餅の表面に触れた感じでカサカサしている。」「この脈は、弦脈と重なることも多く、この場合は「枯弦」と呼称する。

第三脈（細急脈）「一定の緩滑の脈状の中に、一筋の細い芯のある弦脈を打つもの」

第四脈（緩不足、滑不足）

ここで 4 種類に分けられている、藤本氏が述べる弦急脈は、「弱以滑」と分けられた「弦急脈という概念」ではなく、実際に脈に触れた指尖の触覚に基づくものようです。

胃の気の脈状について以前、藤本氏は「胃の気をこそ土台にして諸々の情報が、脈状に現われる」と解説していました。けれどもここでは、その土台である胃の気の脈状が、「欠けている」ものも存在するとしているわけです。

はて。藤本氏は自身の言葉で、「諸々の脈状に弱以滑の脈象の存在することが、平人であり、これに反するものは、すべて弦急の脈、と解した」(49p)と述べています。そのうえでその弦急脈を四種類に分類しているわけです。

さらに藤本氏は、同じページで、この4つに類型された「弦急脈をかみ分け触知できれば、本書での核心部分「胃の気の脈診」が全うされる。実に、弦急脈を把握することに全力をかたむけねばならない。弦急脈とは、先にも述べたように、要するに「弱以滑」を含まない脈状、脈形を指す。」とも述べています。

しかしここにおいて藤本氏は、冒頭で自身が述べていた「胃の気をこそ土台にして諸々の情報が、脈状に現われる」という、老子的な「胃の気の脈診法」の生命観を、自身の言葉で裏切っているわけです。弦急脈を語るときにはこの、脈状を表現する土台である胃の気が消えると言っているわけです。

ここにおいて私は、一元流鍼灸術で話している「胃の気の脈診」と、上段で定義づけられている北辰会における「胃の気の脈診」とは、まったく異なるものであると言わなければなりません。一元流鍼灸術で述べている「胃の気の脈診」はまさに、気一元の生命力の流れの変化をありのままにとらえ表現することを基礎とした、老子的な「胃の気の脈診」だったわけです。

## ■ 生命力がなければ病はない

生命がなければ病はありません。すなわち、生きてさえいればいついかなる時にも生命力があります。そして、その時々々の生命力の状態を探ろうとするものが、一元流鍼灸術における「胃の気の脈診」であり治療方針の立て方です。そこには、個別具体的な脈状一個別具体的な生命状態が存在するだけであって、「胃の気の脈が欠けた状態」があるわけではありません。

これはさながら、海の波が起こる地点を小さく区切ってタイプ別に分類することが無意味なようなものです。波は、岩や風や気圧などの相互関係によって、ただ起こるだけです。臨床家は、患者さんの生命力をさながら浜辺で海の波を眺めるように眺めているだけなのです。そこに竿を差し込みあるいは石を投げ込むことによって、生命力の変化を眺めていく、これが鍼灸師、養生治療家の行っていることです。

この胃の気概念、生命力概念について気づいていたと思われる藤本氏がなぜ、細かい脈状を分類し、さらにはそれに基づいた「症例」をあげることになっていったのでしょうか。

実はここには、洋の東西、時代の古今を問わず、「医学」そのものがかかえている大きな課題があります。それは、「疾医か、養生医か」「病を治療するのか、生命を整えるのか」「症状を目標とするのか、生命力のバランスを整え、それを通じて生命力を充実させていくことを目標とするのか」という課題です。

鍼灸が養生医学といわれる東洋医学を踏襲するかぎり、生命を整え、生命力を目標とすることは当然のことといえるでしょう。

しかし現実には、患者さんの苦痛を取ることが近視眼的な目標となっているため、「治してあげよう」「症状を取ってあげよう」という言葉を用い、なんでも「治せる」治療家として、自己の名を高め集客を図ろうとする一群の人々が存在することとなります。

現代医学ではことに顕著になっているこの、症状を治療目的とした「波頭の分類」およびその波頭を鎮めるための「治療効果の判定—エビデンスを求めること」は、東洋医学の歴史の中にも実はすでに古い時代からありました。それは、医学の発祥由来であるともいえます。

## ■ ...病と生命力とは陰陽関係にはない

明代の偉大な医学家であり、後の医学者および現代中医学に大きく深い影響を与えている張景岳は、「そもそも胃気は正気であり、病気は邪気である、邪気と正気とは本来両立しないものなので、どちらかが勝てばどちらかが負けるからである。すなわち邪気が勝てば正気が敗れ、正気が充実してくれば邪気がしりぞくからである。」(『現代語訳 景岳全書 脉神章』 伴 尚志訳 96p) と述べています。藤本氏もこの『図解／簡明鍼灸脈診法』

を著述した当時も、それを継いでいるものであったと言えるのでしょうか。書かれているさまざまな著書を通じて今も、その同じ香りがしてきます。

しかし、邪気と正気すなわち、病気と胃気（生命力）とは陰陽関係にはありません。生命力は太陽のように大きく生命そのものを支えるものです。症状とは、その生命の陰翳として出ては消えているものです。一元流鍼灸術が生命がなければ病はないと考え、生命力のバランスを整え、それを通じて生命力を充実させていくことこそが治療の目標であると考えていることは、至極当然のことと言えるのではないのでしょうか。

その大きな視点から生命力を調整していくことを通じて、さまざまな症状を同時に呈しているひとであっても、あるいは、症状という自覚はなくともその生命力のバランスを取り充実させていくことによって、病が起こる以前に病が起こらないように身心を整えていくことが可能になるのです。これがまさに、養生治療という発想の基礎となっていくわけです。

胃の気の脈診はそのような、養生治療をしていくさいに、大きな指針となるわけです。

## ■ ...養生とは生命を磨くこと

生命があるから病があります。生命がなければ病むということはありません。完全に健康な生命というものはありません。死は必ず、どのような人にも訪れます。

胃の気があるからこそ、弦急の脈も搏つことができます。それは、生命そのもの（胃の気）とその表現の一部（症状・病）のような関係であって、それぞれが補完し合うような対等の陰陽関係ではありません。

養生とは何かというと、生命を磨くということです。完全な生命はありませんが、よりよい生命状態を求めることはできます。そのために、今の状態から少しずつ自分にとってより良い状態へと生命のあり方を磨いていくわけです。

食養生をして内臓を休める。運動をして筋肉をつける。日々感謝して心を養う。養生治療を受ける。このようにして生命の状態を整え、磨いていくということが養生をするということです。

しかし 完全な 養生はありませんし、完全な 生命状態というものもありません。これは大きな眼差しから見るならば、今ここにおける不完全な自分の状態こそが、まさにこの上

なく完全な私の状態である、これ以上ない生命状態にあるということになります。その「今」を前提として、より完成度を高めるために、日々の生命を磨いていくわけです。

今を生きるということは、今の「不完全さという完全」な生命状態のまま、日々を生きるということです。

養生とは、生命状態をより良い状態にするということです。しかしその生命を使ってどのような人生を送るのかということはまた、別の問題となります。なぜ生きるのか、いかにして生きるのかということは、個々人に任されています。ここに治療家が介入することは間違っています。

このようにして私たちは日々、この生命の世界を生き続けているわけなのですから。

## ■ 参考書

藤本蓮風著『図解／簡明鍼灸脈診法』 一胃の気の脈診― 自然社刊／昭和 59 年 3 月 15 日第 1 版

伴 尚志訳 『現代語訳 景岳全書 脉神章』 たにぐち書店刊 2014 年 9 月 3 日第 1 版